

Book

最近、おもしろかった本

『カモメに飛ぶことを教えた猫』

ルイス・セプルベダ 著 河野万里子 訳 白水社 1575円(税込)

力強いテーマを軽やかにテンポよく 温かい眼差しを感じるシンプルな寓話

シンプルな寓話である。

著者のルイス・セプルベダは、1949年、チリに生まれた。アナキストであった祖父の影響を受け、学生時代から社会主義活動に参加するようになり、1973年の軍事クーデターで社会主義政権が倒れた際には、約2年半にわたって投獄されている。その後、ペルー、エクアドル、コロンビアなどにおいて社会主義活動を行なった後、1980年にこの物語の舞台ともなっているドイツのハンブルグに亡命し、劇作家・ジャーナリストとして執筆活動を行なうとともに、環境団体の活動に参加するなどした経歴をもつ人物である。

訳者曰く、この物語の主要なテーマは、「異なる者どうし」がともに生き、心を通わせることは可能か、現代を生きる人間に驕りはないかといった点にあるという。上記のような著者の経歴を見ると、かかるテーマは単なる概念としてではなく、経験に裏打ちされた力強い叫びとして伝わってくる。

このような力強さとは裏腹に、ものがたり自体は、実に軽やかにテンポよく展開され、堅苦さや、説教臭さは全く感じ

させない。

物語の舞台は港町ハンブルグ。そこに暮らす飼い猫ゾルバとその仲間たちが、ある事情から1羽のカモメのひなを育て、「飛ぶこと」を教えることとなる。

主人公のゾルバは、愛情深く、男気に溢れたクールな黒猫である。また、仲間の猫たちも、それぞれ個性的で自律した、魅力的なキャラクターである。彼らの愛情に包まれて、はじめは頼りなかったひな鳥は、次第にたくましいカモメへと成長し、やがて自らの意志で大空を目指すまでになるのである。

著者は、3人の子どもたちのためにこの物語を綴ったという。そのためか、物語全体を通じて、厳しくも温かく子どもたちを見つめる著者の眼差しを感じることができる。私自身も読み返すたび、これまで出会った温かい眼差しが目に見え、初心を思い起こさせてくれる。そんな1冊である。

(会員 岡田 耕次郎)



『しゃべれども しゃべれども』

2007年／日本映画／平山秀幸監督作品

噺家らが織り成す反目と心遣い、そして友情 小気味良い原作を偽らぬ映像化

児童文学で色々な賞をとっていた佐藤多佳子が、初めて大人向きに書いた小説の映画化。

本自体は10年ほど前に読んだが、思わず笑ってしまう箇所が随所にあり、とりわけ、使われるたとえが言い古された慣用句でなく、作者の独創的な表現でありながら、ピタシカンカンなものには驚かされもし、小気味良かったのを覚えている。

それが、昨年だったか、映画化されると知って、子どもが指折り数えて正月を待つような気持ちで待っていた。

映像は原作を偽っていなかった。落語の世界を垣間見せながら、二つ目から中々上達できないでどこか悩みを抱えている噺家の弟子（国分太一）と、噺家ならうまくいかない他人とのコミュニケーションを改善してくれるだろうと期待して集う3人の男女、人と会おうとポツリと毒舌しか吐けない男（松重豊）、美人だが無愛想で黙りがちな女（香里奈）、小学校でいじめに遭っている大阪からの転校生（森永悠希—NHK朝の連続テレビ小説「芋たこなんきん」で一番下の

子役）が織り成す反目と心遣い、次第に4人の間に友情が芽生えていく様子をおかしさをまじえながら描いていく。特に、国分は香里奈に、乱暴で一見冷たい言葉を掛けるが、言葉とは裏腹に、思いやりの片鱗が…そして、いつしか、淡い恋が芽生え、ゆっくりと膨らんでいく。その展開が見る者を心地よくするのは、やはり、下町の風景の中のできごとだからであろうか。日本橋育ちの私には、昔よく遊んだ路地や街並が懐かしかった。

それにしても、伊東四郎の師匠役、落語「火焰太鼓」の語り口は見事である。以前、風間杜夫の「火焰太鼓」や「芝浜」を舞台で見て、役者とは、こんなにも役柄を変えられるものか、と、ただただ驚いたが、この映画の伊東四郎にも、思わず唸ってしまった。

いやあ、落語っていいですねえ…。

（会員 田中 俊充）

『しゃべれども しゃべれども』
特別版【初回限定生産2枚組】
2007/11/9（金）発売
価 格：¥4,935（税込）
発売元：アスミック／新潮社
販売元：角川エンタテインメント
© 2007『しゃべれども しゃべれども』製作委員会

